

緑のまきば

1986 46.23

小金井緑町教会
小金井市緑町四一十六一三三
電話〇四三二一八一七九六一
編集 牧師 山本圭一

説教

自分を捨て 十字架を負うて、 我に従え

(マタイ16章15〜24)

山本圭一

死の不安ではなく、生の不安に誰しもさいなまれている。終りのない空虚が人々を包み、沈黙したままの虚無に直面した恐怖が、父を失った世界を底無しの無秩序に落しいられている。このように感じている者にとって「偽りの平安」ほど毒々しいものはない。

「彼らは手軽に、わたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている」(エレミヤ8章11)。神の賜物は「安価な恵み」ではない。その平安が偽りであるなら、信仰の根拠は、朝日の前に消えゆく露の如く消え去るだけである。

I

ここに平安を得た一人の人が立っている。ペテロその人である。彼は主に対する信仰の告白によって、主イエスより、祝福とともに黄泉の扉をも克服し、罪の赦しを与える敵そかな言葉として「鍵の

権能」を与えられた。「この時から」キリスト教信仰の最大の秘義が、イエス・キリストの口によって「示された」(16章21)。弟子たちにだけである。も早、公開の宣教ではない。群衆の誰にも示さる。かくて秘義の内容を銘記する必要がある。「イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえるべき」と。この告知の内容を主イエスは教えられなかった。なぜなら「教え」は倫理的性格を含む公開の行為だから。しかし、ここでは十字架の必然の事件が、ただ必ず起るべき事柄として、弟子たちに「示された」のである。

すると、ペテロは自分だけのところに連れてきて脅迫し始め「主よ、神はあなたに対して恵み深くあられる。この事は決して起ってはならない」(22節)。(原意は口語訳より、かなり激しい。)ペテロの判断には「わが主が十字架の死をおとげになるなんて、とんでもないことです」という悲鳴にも似た意志がある。私はこのようにペテロの正直さに打たれる。しかし、このペテロが主イエスにとって「つまざき」とは……。此責の言葉が主の口より奔出する。「サタンよ、わたしの後に立ち去れ。お前はわたしにとってつまざきだ。お前は神のことではなく、人間的なことを考えている。」

II

ここにペテロの——従って現実の教会と信徒の二重の性格が明らかにされる。第一は、主によって召され、恵みによる信仰告白にまみれられるペテロ。第二は、それにもかかわらず誘惑の中に自らの判断に生きて主の十字架を否定するペテロ。確かに教会には「サタンの深み」(黙2章24)についての深遠な教えは与えられてはいない。現実には私たちの不信仰と不従順の中に主のみ旨に反する深刻さを体験して、驚く。その時サタンの深みに落ちた者に語られた。「だれでも私についてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて私に従ってきなさい」この主の言葉を、何としばしば独立の戒めと解して、律法の重荷に転化させたことであろうか。そうではなく、サタンよ、引きさがれ」という主の言葉と結びつけられている。背信のペテロを見据え、弟子たちに再献身をうながされたのだ。誘惑にさらされることと、新たに従うこととは、弟子の生活の中で——従って私たちにも——絶えず繰り返し行われる要件である。

III

敵そかな言葉と言わねばならぬ。ルカはさらに洞察の一語「日々語りかけ給う。もしもこの敵そかな言葉を失えば、キリスト者の存在理由はなくなる。それでは私たちの言語喪失は何によって補完されるのだろうか。第二イザヤの言葉を借りよう。(57章15)「へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかず」と。主はあの言葉を高きより戒めとして語られない。自らの深みにあって心の感性により学び取るものとして論し給う。謙遜であることに終りはない。言葉多きを必要とせず、没我の苦行を求められない。されば主の呼びかけに未だ祈らざりし者をして今や祈らしめ、かつて祈りし者をして、更に祈らしめよ。み名によりてアーメン。